

編集後記

編集委員長 樋口 利彦

日本環境教育学会も発足して16年。これまでの編集委員会の尽力によって学会誌も順調に通巻30号を数えることとなった。昨年は3回の発行となったが、これまでを平均すると年に2回の発行ペースである。学会の規模からして、安定した年3～4回の発行と英語論文の継続的掲載を願っている。それには会員諸氏からの投稿が不可欠である。ぜひとも過去・現在の仕事をすぐにでも文章にまとめていただきたいものである。夏休み・冬休みなどの長期の休暇を活用し、現在の仕事を文章としてまとめることを多くの会員が行っていただければ、年3～4回の発行が可能となっていく。

教育実践や調査結果のデータが整理され、引用文献も揃えることができれば、次は論文章稿の段階となる。その文章化に先立ち、私たちは報告する論文では何を主張したいのかを明確にし、そしてその主張を理解してもらうための論理構成を考えることになろう。

その後、具体的に文章を書き始めるが、文章書きはスムーズに進まず、しばしばストップする。文章化の過程で、最初に設定した論理に矛盾や飛躍が存在することに気づき、文章作成が思うように進まないことがある。その論理の矛盾や飛躍を埋めるために、様々な文献を読むこととなり、文章書きも一時ストップする。文章書きも遅々として進まず、一見苦悩しているように見えるのだが、これは大切な時間であり、論文の質を高める作業である。一つの文献に当たると、また別な資料を検索し、さらにまた別な文献といった調子で、いくつも読むことになっていく。つまり論文にするために机に向かって、粗い構成であっても文章を書くことは、修正の必要性を認識することになり、文献を検索しそれらを読む中で、最初に設定した論理構成とは別な視点から興味深い研究の成果や課題が発見されるのである。最初の予想とはちょっと違ったまとめになっていくが、粗い論理展開から緻密なそして科学的な文章へと洗練されてい

く。またそうした過程を通じて、予想しなかったオリジナルなアイデアが書き手の中に派生するのである。そして研究そのものに愛着がさらに深まっていく。最初に予想した事柄と違っているのは、次の研究の課題が明瞭になったともいえるし、研究に面白さを感じる事となる。粗い原稿でも、何にせよ文章を書くことである。